

碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可
神奈川 碩心会 発行

現在会員数
170名
11月地区別
286名
11月地区別
5-6名
63年11月地区別
(514名)

63年11月号(196)
発行 者 根岸岳萃
編集 者 根岸岳萃
中 村 愛 岳

吟は煙にのって

逗子A支部 鈴木南風

戦後やっと平穏な生活に戻れるようになった昭和三十年過ぎた頃だっと思ひます。今の逗子Aの教室が、まだ古い消防団の詰所だった頃、当時松井先生の師事を受けて、根岸先生、三井先生、下條先生(退会)を初め、五、六人の生徒さんが吟道に励んでいられました。

その頃の先生方はまだ若く血気盛んな頃でした。私とて嫁いで家事、家業に追われる毎日でしたが、主人も一緒に稽古してましたので、吟の事は少しは知っておりました。何しろ裏が教室ですから聞くともなしに耳にしておりました。何の設備もない詰所ですから、冬の寒い夜など、囲炉裏に薪を燃やして暖をとったので、戸の隙間からは煙といっしょに吟声が聞えたものでした。

それから何時の間にか教室も変り、五十五年頃、又改築された現在の場所に成り、同じ頃、松井正風さんに誘われて入会してもう八年になります。あの頃から長い吟道を研鑽された諸先生が、今日の大きな碩心会を担っていられ、その間色々大変な御苦労があったと思ひます。その初代の碩心会

の口火を切った同じ場所です。先輩諸氏に加わり、和氣藹々の中に吟詠を楽しむ事が出来る倅せを本当に嬉しく思っています。先生方の益々の御健勝をお祈りいたします。

叙位

宗匠

根岸岳萃

右冠称を叙す

昭和六十三年七月一日

根岸先生がこの度右叙位を受けられました。会員一同心からお祝い申しあげます。

三国志と

(その2)

三峽下りを訪ねる旅
加藤岳相

五日目は今回の旅行のハイライト三峽下りに入る。長江(揚子江)は全長六三〇〇軒、その内の重慶―武漢間一二七四軒が三峽下りで有名。我々は武漢の手前の岳陽迄の一〇〇軒を観光する。七時十五分ホテルを出発する時はまだ薄暗い。七時三十分乗船。我々は最上デッキの二等船室(一等は無し)四帖半位の二人用のベッド付の部屋、三、四等の船客も満員のようだ。船は五〇〇〇トンの江漢五二号、定員一三〇〇人、一時間二〇軒、三〇軒の速力を持ち、船内には医務室、売店等も設備されている。

八時五分重慶天門埠頭出港、茶褐色の水の上を動き始めた。この船も観光客とこの地方の唯一つの交通機関として就航している。

兩岸はなだらかな丘が続く。時々五、六軒の部落や工場らしき建物が見え、丘の斜面にはトウモロコシのような農作物が栽培されているのが見える。船は悠揚とした流れに乗って、途中三国志の舞台となった港に寄港、船客を乗降させながら二十時二十五分万県に到着、明朝二時迄停泊すると言ひ。長時間停泊の理由は、このまま航行を続けて行くと夜が明けないうちに三峡を通り過ぎてしまつて、観光にならない為らしい。停泊の時間を利用して二時間上陸、絹織物工場見学、街の夜店を散策して帰船し、明日を楽しみにベッドに入る。

六日目五時、万県を出航した船は九時五十分三峡の瞿塘峡に入ろうとしている。三峡とは、四川と湖北の省境にそびえる巫山山脈を長江の激流が穿つてつくれた三つの大峽谷の総称である。重慶側より瞿塘峡八料、(この区間に白帝城がある)巫峡四十四料、西陵峡七十六料を含めた南津関迄の一九八料である。天候も我々が中国に来てからはつきりしない天気が続いていたが、今日は我々を歓迎するかの如く薄陽がもれるようになった。山の景色もだんだん険し

くなつて来た。河中も狭くなり流れも早くなっている。我々一行は、船の前方デッキでカメラの放列を待構えている。白帝城が小高い山の上にボンと見えて来た。劉備永眠の処、その中腹に諸葛孔明等を祀る明良殿も見える。

白帝城を過ぐる辺から兩岸は断崖絶壁の山々が続き、見上げるような絶壁の山が眼前に迫る。河中も百米位になり、流水も逆巻きながら巫峡にだれ込む。瞿塘峡に続いて奇峰、怪石の連続である。船の行手を遮るのではと思われる山が現れたり、まるで壁画のパノラマのようだ。やがて中食、船も巴東到着、巴東出航後最後の西陵峡に入る。前二峡と同じような風景や故事来歴の多い変化に富んだ峽谷を進む中に河中も次第に広くなり流れもゆるやかになつて三峡の最後の南津関に十六時四十分到着。二十米の落差の運河を通つて宜昌に寄港、夕暮れの長江を岳陽に向つて走る。

夕食後三峽下りを記念して、西独の旅行中の若い男女のカップルや、中国の子供連れの女性、船室係の女性二人を交えてサロンデッキでパーティーが開かれた。各自持ち寄りの色々な品が出る。興がのるにつれて、歌、民謡、踊りも出て夜の更けるのを忘れた楽しい一時であつた。(つづく)

第94回全国吟道大会参加

県本部吟行会

(第一日)会津若松から飯森山へ

堀内A 石渡桂岳

十月一日早朝曇り空の下、寒い地方に行く事とて、それぞれ大荷物を持ちながらも勇んで上野駅から「やまびこ号」に乗り、きめられた席に着きほっとひと息。さすが東北新幹線、一時間二十分の速さで、あつという間に郡山着、駅前より五台のバスを連ねて、柳並木の街筋を会津若松に向つた。先ず嬉しかったのは、猪苗代湖の上空雲の切れ間から青空が広がり、燦々と秋の陽光が湖面にそよぎ、遠くはコバルトブルー、中心部はエメラルドグリーンと、くっきり彩りを分け、澄みきつた其の美しさに一同息をのんで見つめるのみ。前方に磐梯山、両側の水田は稲穂の黄を広げ、鶴ヶ城を遠く赤松の彼方に見定める事が出来た。昼食は復元された会津武家屋敷九曜亭にて済ませる。昔さながらの直径4mの水車はごっとなごっとなと廻つて藩の精米所の當時を思わせた。

午後は鶴ヶ城見学、五層の天守閣めざし

立ちこめ、バスの中まで入ってきました。
遠く蔵王連峰を望み、右に左に磐梯山、
安達太良山と、果ては雲海までも見事に開
けて、変化に富んだ大自然の営みを満喫さ
せてくれました。

白樺の峰つばくろ谷（岩ツバメが住んで
いたところから名付けられた）を経て、吾
妻小富士を目の前にする。この辺り一帯は
荒涼とした火山灰地で、登ろうとすると、
今にも崩れそうに見えました。浄土平に着
いたのが九時四十分、ここが千六百米の高
所……。

小休止して安達太良山を左車窓に見なが
ら山を縫い、谷を下って、吾妻スカイライ
ンと別れ、105号線に入り五色沼に向った。
途中、ガイドさんが山形弁でりんごの唄「
アゲーリンゴッソサ、クツブルーブツゲター」
を披露、荷物にならないからおみやげに覚
えて帰ってほしいと言われて爆笑のうちに
皆さんも何とか物にしたようでした。

五色沼はテレビ等でその美しさを紹介さ
れておりましたが、来たのは初めてで、と
ても感激しました。エメラルドグリーン
あの素適な色、沼に手を入れて五色沼の感
触を味わってきました。

裏磐梯高原白雲荘で昼食、辺りの景色を
眺め散策して出発したのが午後二時、西吾

妻スカイバレー檜原湖畔を通り、白布峠で
十分休憩、枯れて折れた太い木に「さるの
腰かけ」がたくさん付いているのを見まし
た。ここが福島県と山形県の境、いよいよ
山形県に入り、錦平辺りから紅葉が見られ
るようになりました。赤滝、黒滝、不動滝
と三つの滝が一つ場所で見られ、これが最
上川の源流だそうです。

西吾妻トンネルを通り抜け、色とりどりの
可憐なコスモスの花の咲き乱れている道
を通ってバスは米沢市内に入った。上杉神
社にお詣りし、最上川の上流を渡り、葡萄
の本場赤湯を通る頃は陽も大分傾き、山斜
面にビニールハウスの葡萄畑が限りなく広
がり、さらさらと夕陽に映えて美しかった。
薄墨色にけむる出羽三山を左に約三十分、
何時しか陽はとっぷりと暮れていた。赤い
大鳥居をくぐり、蔵王温泉に近づくにつれ、
まばゆいばかりのネオンが目の前に開け、
今日の旅の疲れを癒すホテル蔵王に着いた。

(第四日) 快晴の蔵王とりんご狩り

堀内A 杉山雪岳

十月四日、旅の終りの日、今日も快晴の
朝を迎え、皆元気に車中の人となる。バス
は蔵王エコーラインを快調に走る。奥羽山
脈が遠く連なる山又山に、空か雲かと思わ

せる雲海の広大さに目をみはるばかり。絶
景かなのひと言につきる。シャッターチャ
ンスをとバスは時々徐行。ふと車窓より下
をみればガラスの破片をちりばめたように
きらりと光る霜柱、遠く近く残菊か、小さ
な名も知らぬ花が可憐にゆれている。蔵王
連峰を東西に横断しているこの山岳道路は
昭和37年にエコー（山彦）ラインとして開
通されたという。北の地方も雨が続いたと
いうことで、緑の冴える中に紅葉の美しさ
は筆舌には現わすことのできぬ想像以上の
風景でした。

中央火山の最後の爆裂火口に水がたまり
出来たという、蔵王のシンボルお釜に到着。
気候も良く、見事に晴れた山頂には霧もな
く、コバルト色に乳白色を交えた水面は、
何かを秘め、何かを物語っているかのよう
このお釜も年々回りが自然に削られて、水
深が浅くなってゆくのだと聞く。美男、美
女とカメラのシャッターしきり。刈田岳
山頂迄足をのばし、全員無事帰郷できます
ようにと祈る。

朝日連峰、東連峰を右に左に、青森とど
松、ぶな原生林を車窓に眺めていると、ベ
テランの運転手さん、「こんなに素晴らし
い眺めは今年に入って二度位しかないです
よ」の言葉に伴せを感じながらエコーライ

て登りつつ、武者窓から吹き込む涼風の爽やかさを味った。城内は郷土博物館として、重要文化財数百点を陳列、なぜか会津の人の気持が伝わる様な城内の様子であった。城をバックにスナップ写真を撮る人達が絶えない。

快晴の空のもと二時四十五分飯森山に向って出発。山の登り口にある白虎隊記念館に入って、五千余点もある攻防両軍の様々な史料には驚きました。戊辰の仲秋、戸の口原の戦に破れた会津軍の遺品、二階踊り場に掲示された色紙の一句

「絶るもの無き大屋根に雪下ろし」会子の前に立ってじんと胸に迫る遺族の思いを感じました。

飯森山の登りはエスカレーターが設備され、白虎隊の墓に老幼も参詣し易い。思えば、大東亜戦争でも少年航空兵、特攻隊と純粋な若者が真先に盾となって戦死しました。苔むした墓に向って深く頭を下げる皆でした。

山を下りて第一夜の宿に入った。大広間で夕食前に合吟練習・明日の健吟を祈って乾杯、大会に備えて各自早めに部屋に引上げた。

朝靄の静かに流れ紅林檎
山紅葉蔵王火口に青き水

(第二日) 全国大会に参加して

逗子B 平山栄風

十月二日いよいよ大会。天気はと案じつつ外を眺めると昨日と同じ上々の天気、小躍りして午前八時出発し、福島県文化センターに九時半到着。広い会場には二千三百人以上の各地吟友が着席。

起立して天皇陛下の御病氣御快癒の祈念後、木村岳風先生御遺影に対して礼、一同君が代の大合唱、長谷川副理事長の開会の辞、優勝旗返還、全員による朗詠、竹末副理事長の明治天皇御製・あさみどりの謹詠。

そしていよいよ第一部会員吟詠に入り、次は勇壮な音楽の調べにのって会旗入場、全員拍手を以って迎えるいつもながらの入場式は壮嚴、如何に岳風流吟道が盛んであるかを物語っています。地下の祖宗範岳風先生もさぞかしお喜びの事と思ひ目頭が熱くなりました。

式典に入り大会実行委員長長佐藤岳養先生大会々長竹末岳陽先生、来賓の方々の祝辞があり、合吟コンクール、諸先生方の独吟、当神奈川県本部は五十名位ずつの女性合吟「神州」と「爾靈山」、約七十名の男性による「神州」の大合唱で皆一生懸命努力しましたので、上々の出来でした。又地元福

島岳風会の三百人以上による大合唱「海南行」「憶母」「常盤孤抱図」は実に立派でした。合吟コンクールは一位福島岳風会、二位山形岳風会、三位東根岳風会でした。最後に伊藤岳智先生の閉会の辞で恙なく大会を終了しました。五時すぎ、飯坂温泉ホテル聚楽に到着、大会の疲れを温泉に入っで癒しました。私事になりますが、私もこの十二月で81才の誕生日を迎えますので、行こうかやめようかとさんさんためらいましたが、行く事に決心し参加しました。皆様に大変お世話になり、特に高橋俊泉さんには自分の親のようによく面倒みて下さいました。厚く御礼申し上げます。来年も是非行きたいと思っております。

(第三日) 高原と湖の磐梯から米沢へ

逗子A 渡辺秀岳

三日目も天候に恵まれ、思わず天に向って有難うと感謝しつつ、朝八時飯坂温泉ホテル聚楽をあとにした。朝霧の中フルーツライン(バス通りの両側に林檎、梨、葡萄等が実っている)を通り抜け、八時四十分頃磐梯吾妻スカイラインを登りはじめた。谷川の溪流や、紅葉にはまだ少し早い、素晴らしい山々を眺め、高原温泉地帯の高湯温泉を通りかゝった時には硫黄の臭いが

ンを下る。

黄金の波うつ田園の広がる道を上ノ山へと走り林檎園に到着。赤々と色づいた林檎の木の下で大きな林檎をほほばる姿はまるで子供の様に可愛い。お土産を注文し、再び車中の人となる。上ノ山駅に近づく、四日間お世話になった運転手さんと、お国なまりで（こちらから頼んだ）楽しくしてくれたまだ十九才になったばかりと聞くガイドさんに、お礼の言葉とともに

又も来るから身を大切に

はやり風邪などひかねよに：

と加藤岳相先生の美声でねぎらいの民謡の「お立酒」はこの場にびったり情景。ガイドさんは涙：涙で挨拶の言葉もでない様子に、乗客の私共も又同じ涙：根岸会長が「そうだよ、病気などせずにがんばるんだね」の言葉を最後に、この若いガイドさんに幸多かれと願ひ、バスともお別れし、紺碧の天空の下、この美しい大自然の陸奥にも別れを告げた。

12時50分上ノ山駅にて、サロンエキスプレスに乗車。応接間式の一室に六、七人、つに分れ、ゆっくりと足をのばしてほっとひと息。後尾車が展望車になっており、カラオケサロンとして自慢ののどの競演。美味しい夕食の釜めしを頂く頃、須賀川駅か

ら鏡石あたりで陽は西山に、夕焼雲を茜色に染めて沈み、東北の山々はすっかり闇に包まれてしまいました。

終着駅品川に予定通り21時23分到着。それぞれに最寄の駅にと別れ、22時30分返子駅着。お疲れさま、又来年もという言葉を交し、第94回吟行会も恙なく終り家路に着きました。最後になりましたが色々お世話下さいました諸先生方、ありがとうございます。

白虎隊士の墓に詣て作有

松和 宇都宮徳風

飯森山頂自刃の痕

白虎の壘前香火繁し

痛哭難に殉ず忠烈の志

風は蕭々として語る会津の魂

十周年を迎えて

真澄支部 星野輝風

十年前の秋風吹き初める九月初旬、村田先生の「九月十日」の吟をお聞きしたのが、私達の詩吟との深い始まりでした。あの時の全身が総毛立つ様な強い感動を忘れる事が出来ません。

根岸先生初め、諸先生方のお力添えをい

ただきまして、度々コンクールにも出場させていただきながら、もう一步の力不足で御期待に添えず、申し訳なく思っております。その度に、熱心に御指導いただき、心を一つにして頑張る、又それを応援してくれた人達が、一つの和となって十年もの長い間、不平不満もなく、和やかな支部を作っていたのだと思います。

村田先生のもとに、今迄の十年を踏み台にして初心に戻り、又次の十年に向って、仲よく楽しく学ばせていただきながら、人生の山坂道を御一緒に越えて行きたいものと思ひます。皆様よろしくお願ひ申しあげます。

第44回県本部吟道大会

合吟コンクールに三位入賞

10月23日綾瀬市文化会館に於ける右会に傾心会堀内支部・F（曾村静子他九名）チームが見事入賞おめでとございました。

短歌

葉月 小池和風

薄塩に作りし小さきむすび持ち

身籠りし娘に付きて座しおり

晒持ち娘と落ち合ひし病院は

二十五才で汝を産みしとこ

練吟
静夜思

○ 牀前月光を見る

疑うらくはこれ地上の霜かと

頭を挙げて山月を望み

頭を低れて故郷を思ふ

李白の「静夜思」は、どなたも暗記され十分理解されているところであるが、この詩にかぎらず、絶句は短詩形であるがために詩語の省略があるので、時には解釈に相違を生ずることもある。この詩はその典型的な例で、学者間でも諸見解があるので、以下気楽に読んでいただきたい。

○起句「牀前」を、教本の(通釈)は「寝台の前のしき石に」としているが「しき石に」はよけいな説明。寝室にしき石が置かれていないことはない。さて、「牀前」には大別して次の三つの見解がある。

- (1) 寝台の前
- (2) 就寝するとき(寝る前に)
- (3) 庭の牀の前

(1)は寝台の前であるから室内。床の上にさしている月光を霜かと思つた、というのである。窓から庭の月光を見たのでは当り前で詩にはならないし、だいいち、地上の霜かと疑つたと承句でわざわざ説明している。

(2)この詩は深夜や夜明け前でなく、李白が宵に一杯やり、うとうとした後の、恐らく前半夜のこと。ふと目覚めてみると、すばらしい月光が部屋(寝台は室の中央が例)の床一面に指しこんでいるのを霜と思つた。

(3)「牀」はしんだい。こしかけ。寝台とこしかけを兼用できる家具(漢語林)。どの漢和字典もほとんど同じ。庭に持ち出せるような寝台もあるが、ここではこしかけの場合と解釈。すなわち、李白は庭の腰掛で一杯。一寝入りしたのか、目が覚めるとあたり一面月光が霜のよう。

○転句「頭を挙げて山月を望み」の山月は山の端の月。「頭を挙げて」だから速くこの月でなく、真近の山の上に出た月ということになる。(3)の庭の腰掛で目が覚め、頭を挙げて山月を望み見るならば自然の動作になるが、屋内ならば窓から見上げることになりやや不自然。そして結句の「頭を低れて故郷を思ふ」も、庭で挙げた頭をたれて故郷を思ふのなら真実味が感じられるが、窓ぎわではどうも絵にならない。

○詩は理屈はいらない。白髪三千丈もその例。したがって、室内だろうが庭だろうが問題とするに足らない、というのが大方の説。寝台から、真近の山月が見えようが見えまいが、名詩であることに変わりはない。

(訂正)

63⁹ 月新入会の 853 伊藤和子は伊東和子に訂正 (住居表示変更)

125 千葉美風 横須賀市長坂二一八一八に (移籍)

3 加藤岳相 逗子Aより一色B支部へ

10 竹石憲岳 逗子Aより長柄支部へ

(入会)

514 石原フミ子 逗子市沼間二一八一二三

(逗子A) (電)〇四六八一七二一〇七五四

47 515 高見 巖 逗子市池子一七七一四

(逗子A) (電)〇四六八一七三一五八六

516 長島雅子 葉山町長柄三八七

(逗子A) (電)〇四六八一七五一八九五〇

517 水野みえ 横浜市栄区桂町一八一四

(大船A) (電)〇四五―八九二―三三八七

518 中村不二子 葉山町堀内一〇三二

(堀内・F) (電)〇四六八一七五一〇〇一

519 根岸敏子 葉山町堀内一六五

() (電)〇四六八一七五一五四二二

520 根岸寿 葉山町堀内一〇五〇

() (電)〇四六八一七五一七二二五

521 山地イチ 葉山町堀内一〇三〇

() (電)〇四六八一七五一〇九九

(退会)

456 159 藤島俊風(下山口) 318 塩島玉山(逗子A)

横溝平八(松和)